

こけしの里

THE TSUCHIYU NEWS

Vol.1



『こけしは心の鏡、癒やし』

写真は土湯こけし工人の皆さんの作品を展示したものです。東京こけし友の会初代会長である西田峯吉氏は心に郷愁を呼び起こすようなこけしを「原郷のこけし」と呼んでいました。土湯こけしの持つ味わいをじっくりご堪能下さい。

こけしは土湯のこころです
土湯温泉は日本でも有数のこけしの里です。こけし工人たちが作る、優しく見つめてくれるような独特の表情と、素朴な木の手触りを持つ「土湯こけし」は、今も昔も変わることなく多くの人の心を和ませてくれます。
全国各地の「伝統民芸品」と呼ばれ、伝えられているものの多くは、ほとんどがその土地々の暮らしに根付いた生活の道具や、子供たちのために玩具として作られていました。土湯温泉も例外ではなく、一年の三分の一を雪に閉ざされ、湯治客も現在とは比べものにならないほど少なかった時代、暮らしはもっぱら林業に頼るだけでした。辛い山仕事の合間、貧しさの中でコツコツと、ある時は家族のために、ある時は貧困からの脱出を夢見て続けられてきました。人々はどんな気持ちで作り、伝えてきたのでしょうか。
現代の工人たちの作る土湯こけしにも、そんな遠い昔からの「土湯の歴史と風土と人のこころ」が込められているに違いありません。それゆえにこそ、あの柔和で優しく温かい表情が生まれるのでしょう。こけしは土湯のこころの表われなのです。どうぞじっくりと触れてみて下さい。

学芸員の相原さんに聞く。



こけしは福島で生まれ育った私にとっては昔から部屋に飾ってある身近な存在でした。でも、西田記念館で働くことをきっかけに、もともとは子供の玩具で産地により特徴があることを初めて知り、とても奥深いものであることに気がきました。こけしは控えめにそつと微笑みかけてくれる存在ですが、東北の厳しい風土に生きる心を表すかのような芯の強さも感じられます。その表情も様々で毎日見ているとは思議と飽きず、かえって初めは変な顔と思っていたものに味わい深い魅力を感じるようになりました。最近では都会の若い女性を中心にこけし人気が高まっていますが、風土を反映して生まれたこけしの魅力は、ぜひ産地を訪れて感じていただきたいと思っています。

土湯こけしまつり



毎年四月の第三土日に開催される土湯こけしまつり。「こけし供養祭」や「こけし絵づけコンクール」表彰式など年々、参加者も増え盛り上りをみせています。会場ではこけし工人による実演や子ども達がひく「こけし山車」も楽しめます。



美観展

毎年七月に西田記念館で開催される「美観展」は平成三年に若手の伝統こけし工人の親睦と創意工夫の高揚を勤めようと発足した美観会の展示会です。東北各地約三十人もの会員との記念の合作のこけしも作られ、腕を競い合っています。



原郷のこけし群 西田記念館

福島市荒井横塚三十一八三
(アンナガーデン内)
電話〇二四(五九三)〇六三九

体験も楽しめる観光施設

四季の里

土湯温泉から車で約十五分の四季の里では地元の新鮮な農産物の販売だけでなく、施設内のレストランで味わう事もできます。また、ハイブ園やわんぱく広場など家族連れでのんびり楽しむことが出来る観光施設です。また、ガラス工芸やこけし工芸などの体験が出来る工芸館では、指導を受けながら実際にこけしの絵付けなどを楽しめ、こけしや



こけしグッズの販売も充実しています。土湯こけし工人によるこけしの製作実演も見学できます。

四季の里

福島市荒井字上鷲西一の一
電話〇二四(五九三)〇一〇一

こけし雛・つるし雛

こけしの里、土湯温泉では雛飾りもやっぱり「こけし」。旅館などでは可愛らしい「こけし雛」が飾られます。平成二十四年には温泉街に「日本



一のこけし雛」が誕生しました。こけし工人陳野原幸紀、渡辺鉄男の合作で「震災で暗くなった温泉街に元気を」との思いからうまれたこけし雛です。毎年、ひな祭りの時期にあわせてこけしのひな祭りイベントを開催しています。ひな祭り期間中は温泉街がこけし雛とつるし雛で彩られます。



編集後記

ようやく土湯通信のニューバージョンを作ることが出来てうれい事です。今回はこけし特集とまち歩きをコラボした特集となりました。こけしについて造詣を深め、まち歩きでこけしの心を感じてもらえればうれい事です。(出戻りの和)

今、都会ではこけしブームが来ているそうです。こけしの地元、福島でもっとこけしが注目されればいいなあと思います。温泉街のいろんなところにこけしが隠れているのでまち歩きしながらこけしを探してみたい(和)

参考文献
・菅野新一・土橋慶三・西田峯吉編、こけしのふるさと(未来社刊)
・鹿間時夫監修、こけし辞典(東京堂出版)



土湯木地業の始まりと発展

現在、土湯こけしを製作しているこけし工人の源は、鉢盆などの木地製品を作る「木地屋」「木地挽き」と呼ばれる人々であったといわれています。こけしの歴史と木地屋の歴史は必ずしも一致しませんが、土湯へは三百年ほど前に会津の高森村、達沢村あたりの木地集落から山を超えて伝わってきたと思われるようです。古文書にも「当村は、田方作物などもなく、温泉場であるゆえ、平日入浴人の宿をしていささかの木銭を取り、その他は男女山仕事に相済み、あるいは挽地、下駄、棒類の細工を持って生活している村柄である。」とあり、山間の土湯温泉にとつて木地業は重要な産業でした。その後、近郷村落との交流が活発になるにつれ、地場産業としての力を持つようになったようです。

やがて土湯温泉は、旅館が建ち並び、廻し舞台が常設されるようになり、遊郭などで遊ぶ人々も多くなりました。風呂は下ノ湯と中ノ湯の二箇所（当時は公衆浴場だけでした）があり、風呂帰りのお客様は必ずというほど木地挽物を求めたといえます。また川俣地方を中心とする絹織物業は原糸を巻くための木管や機械部品を木地物に頼ったため、土湯の木地業はその大きな支えとなり、ますます発展していきました。しかし明治になると東北以外からの製品や、ブリキ、セトモノ、鉄などを素材にしたものにとつて代わられるようになってしまい、土湯の木地業は湯治場といういわば保養、行楽の地としての性格ともあいまつて、次第にその中心は小物家具、子どもの玩具へと移っていったのです。

土湯とこけし



土湯ルネッサンス

再び土湯こけしが注目されるようになったのは、いわゆる「土湯ルネッサンス」と評価される斎藤太治郎や阿部治助、阿部金蔵たちによる新しいこけし作りへの動きです。彼らの作品は、以前のものに比べると「まで」（方言でいねいという意味）な仕上げをほどこし、洗練されたこけしを目指しました。そして彼らの作品はこけし収集家の絶賛を博し、昭和十一年の第一次こけしブームの中核をなしました。それはやがて昭和四十年代ごろの第二次こけしブームへと続いていきます。

そして現在、第三次こけしブームとしてこけしが注目を集めています。第一次・第二次ともにブームの中心は中年の男性でしたが、第三次こけしブームは若い女性を中心に広がりを見せています。こけし専門の雑誌やこけしモチーフの雑貨などの影響もあり、こけしは主に関東方面の若い女性に人気となつていくようになります。こけしは手作りで一点もの、価格も小さいものは千円程度ということも魅力のひとつになっているようです。

こけしが注目される今、こけし作りも時代にあわせた進化が求められています。

こけしとは

東北地方では以前から「こけし」について様々な呼び方（方言）があり、土湯では「でこ」「でく」などと呼ばれていました。現在でも信じられている「子消し」という子供を間引いたその霊をなぐさめるために作られたという俗説には何の根拠もありません。本当は「子宝に恵まれない」との望みと、当時のお土産のひとつの女の子のままごと道具として「こけし」に進化し、子供を愛するゆえに生まれた愛玩具として現在まで作り続けられています。



こけしの鑑賞方法

これと言った決まりはありませんが、何10本と並べ、群像として眺めてみるのもひとつの方法でしょう。いろいろな表情の複雑な交錯があつて面白く壮観です。また、1〜2本を単独で玄関の棚に飾ったり、陶器や花などと組み合わせインテリアとしてコーディネートしてみると風情があり、こけしの美しさが一層鮮明になります。いずれにしてもこけしは、私たちの生活のごく身近なものとして、日常的に目に触れるところに置きたいものです。



ロクロ引きの発達がこけし作りに新しい息吹を

二人挽きロクロ
網の引き手とロクロの挽き手の呼吸がびつたり合う事が重曹で引き手は書や弟子たちの役目でした。



明治の中期に土湯木地業にとつて大きな変化が起こりました。それまでロクロは網取りと鉋取りの二人で挽くものでしたが明治十八年、伊沢為次郎という木地職人によって、当時関東地方で発達した一人挽きロクロの技術が伝えられたのでした。一人挽きロクロの普及は能率の向上だけでなく生産能力、そしてなにより製品の仕上げに違いをみせました。このように明治になると土湯の木地師達は外部からの新技術や様々な刺激を受け、当然の結果として、作風にも大きな変化が生まれます。後年「土湯ルネッサンス」と呼ばれる土湯こけしの成熟、つまり子供の単なるおもちゃとしてのこけしから、描彩、仕上りの美しい観賞に耐えるこけしへの移行はこのようにして始まったのです。

一人挽きロクロ
自分で回転させながら挽くため、網挽きロクロより自由に使いこなすことができ、技術や作品の進歩に繋がりました。



現代土湯こけしへとつなぐ架け橋

土湯系こけしの特色は「簡素、素朴」の美しさといわれています。描彩は頭に墨一色の単純な蛇の目を入れ、それに大ぶりの紅の「カセ」をつけ胴は原則としてロクロ線を主体とします。弥治郎系や遠刈田系の大きく派手な頭、鳴子系の頭と胴の均整美、量感などと比べると華やかさこそありませんが、けつしてひけをとらない味わいがあります。明治以前の作品は度重なる大火や戦乱によって残されていないため確かなことは分かりませんが、明治初期までの土湯こけしのロクロ線は紅と墨で挽かれていたといわれています。そのなごりは明治に作られた佐久間浅之助の作品や制作年代は少し後になりますが、渡辺作蔵や西山弁之助の晩年の作品にも見られるようです。浅之助の遺品は赤と青のロクロ線で返しロクロ線の技法も使っています。作蔵の遺品も胴は赤と青ですが、あるものは紫なども使い始め、少しずつ現代土湯こけしへの移行を感じさせています。

これら三人の工人の作品は、いわば明治以前と現代土湯こけしをつなぐ橋といえるようです。しかしそれらのこけし工人たちも明治三十六年の大洪水によって受けた災害の為、こけし製作の中心でもあった湊屋一族が、土湯を去るに及んで少しずつ活動は衰え、工人達も石工や農業を兼業せざるをえなくなつていったのです。

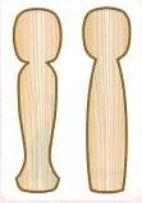
土湯こけしの特徴

土湯系は比較的頭が小さく、胴も細めで女性的です。頭は黒一色の蛇の目模様と大ぶりの前髪があり、両側の鬢に紅のカセ（髪飾り）が大きく描かれています。胴は大筋の間に赤、黄、緑の繊細なロクロ描きの横縞が入って、クジラ目にたれ鼻、おちよほ口と表情の明るいのが特色です。そしてなにより、頭が胴にはめ込み式で、首を回すとキキイと愛らしく鳴くのが特徴です。土湯こけしを最初に作り始めたのは、今から一七〇年ほど前の文政年間の人、佐久間亀五郎といわれています。後に長男の弥七が首の回るこけしを創案したとされています。

発布

- 発生地／福島市土湯温泉町
- 分布／福島・岳・川俣
- 垂系／鶴湖垂系（飯野・日野）
- 中ノ沢垂系（中ノ沢）

形態



- (1) 胴が比較的細く、中央部がかすかにふくらむエンタシス型
- (2) 三角胴といわれる握りやすいものもある

描写



- 頭頂／蛇の目黒
- カセ／前髪とビンの間の赤いカセ

眼



- 土湯系
- 鯨目
- 二重

鼻



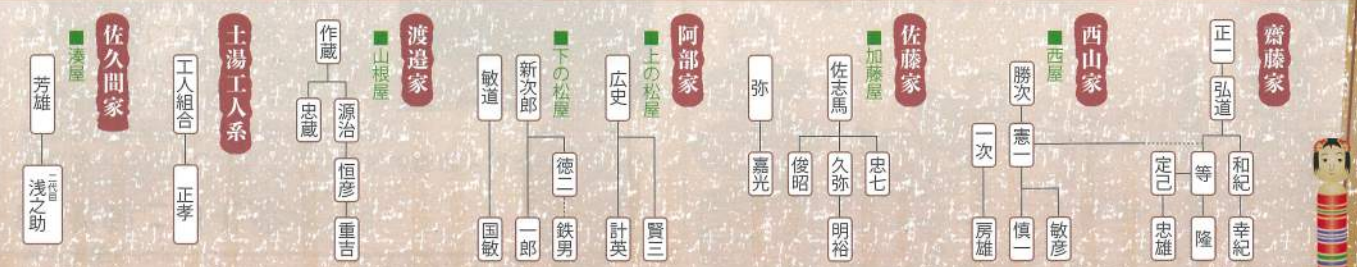
- 丸鼻

胴模様



- (1) ろくろ模様（基本型）
- (2) ろくろ模様の間に手描き模様

土湯こけし系統略図



土湯こけし 工人組合所属 工人名鑑

こけしの顔、表情は工人によってそれぞれ。十人十色です。
こけしと工人の顔を見比べてみて下さい。本人の顔、家族の顔にどこか似ています。
こけしを見て、工人をみて自分の伴侶を探すつもりで求めるのも良い方法です。

生きた目を描くことが、 父師匠への感謝



9 渡邊 隆

昭和28年生れ
福島市土湯温泉町字杉ノ下24
☎(024)5995-2316

渡邊隆は、勤めの傍ら家業の土産店を手伝い、さらにこけし工人として活動している。渡邊隆は、土湯の生まれではないが、縁あって土湯こけし工人の渡邊等氏の娘さんと結婚。結婚当初は、こけし作りがあまり興味があつたが、義父である等氏の作るこけしに惹かれるようになり、昭和五十五年弟子入りし、こけし作りの道に入る。当然のことながら、こけし作りに専念する時間は取れ

一言コメント

伝統を守りつつ、研究心を持ち、これからも多くの人に愛されるこけしを作っていきたい。

自分の心を こけしに表現



7 徳永 慎一

昭和8年生れ
福島市土湯温泉町字日向22
☎(024)5995-2338

徳永慎一は、夫婦で農業を営んでいたが、土湯こけしに魅せられ、西山憲一氏に師事した。昭和四十八年、四十歳の時、こけしの作風は、西山憲一氏のこけしのやさしい表情を本人型に取り入れて完成させた。目と口のバランスに気を配り、こけしを買い求める人がおもしろいと思われ、取ってみたいと思われ、作りをしている。徳永慎一の工房には、こけしの原木が山と積ま

一言コメント

自分で納得のこけしが完成し、これからはお客さまに喜んでいただけるよう、がんばっていきなりたいと思います。

こけしの微笑みは、 わたしの微笑み



1 阿部 国敏

昭和47年生れ
福島市土湯温泉町字下ノ町25
☎(024)5995-2156

土湯こけしの中で一番若い阿部国敏は、土湯こけし隆盛時代の名工と言われた阿部治助氏の曾祖父に持ち、祖父の勝英氏、祖母のシナさん、父の敏道氏と続く土湯こけし工人の名家に生まれた。十九歳でこけし工人の道に入り、木地を陳野原幸紀氏に、描彩を父阿部敏道氏に師事し、着実に木地挽き、描彩の技術を磨いてきた。福島市に由来もある美人画家の竹久夢二がヨーロッパ旅行の際に靴に

一言コメント

これからのこけし作りの腕をみがき、伝統を守りながら新しいことにも挑戦し続けていきます。

独学から生まれた 土湯こけし



10 渡邊 鉄男

昭和12年生れ
福島市土湯温泉町菅ノ沢39の3
☎(024)5995-20056

師匠について腕を磨く工人が多い中、渡邊鉄男は、昭和四十八年から独学でこけし作りを続けてきた。渡邊鉄男のこけしの型は、西山徳二型を受け継いでいる。型があるとは言え、制作にあたっては毎日こけしとにらめっこしながら模索の連続。渡邊鉄男のこけしは、鮮やかなつばきを描き入れるのが特徴で、顔のかわいらしさに加え、全体的にあどけない雰囲気を感じさせる。こけし以外にも

一言コメント

極小の独楽から3mこけしまで、木地技術を活かし、これからも勉強を続けお客さまに愛されるこけしを作りたいと思います。

西屋の伝統を守る



8 西山 敏彦

昭和34年生れ
福島市土湯温泉町字懸戸尻7の1
☎(024)5995-2401

西山敏彦は、西山弥三郎、浜吉、弁之助、勝次、憲一と続いた西屋直系の工人。父である西山憲一氏のこけし挽きを幼少の頃から見て育ったが、平成五年三月までは会社勤めをした。こけしと縁が途切れていた。三十五歳で会社を退職後、父憲一氏に師事し、弟子入りしたものの、翌年には福島市内で民芸品店を開業し、平成十八年まで自営業を営んでいた。平成十九年に憲一氏の意思を引き

一言コメント

西屋のこけしを伝承するとともに、時代に適応したこけしを作り出すこと。強いては自分もこけしも常に進化し続けることを心がけていきます。

こけしは 乙女心を映し出す



4 近野 明裕

昭和25年生れ
福島市佐原字田中内38の2
☎(024)5993-3408

こけし工人の道に入ったのは、昭和五十五年、二十九歳の時。佐藤久弥氏の門をたたく弟子入りした。勤めをする傍ら毎週末は師匠の工房に来て、見よう見真似で十年間修行をした。上達するため、自宅にろくろを設置し、時間があれば朝夕問わずこけしを削っていた。近野明裕のこけし作りは、理想の女性の顔、夢の恋人だった人の顔を描きながら制作すること。その出来上

一言コメント

こけしは可愛い女の子。心を込めて描きます。生涯の仕事として続けていきますのでよろしくお願ひ致します。

自分の心を映し出す、 わたしの土湯こけし



5 齋藤 弘道

昭和5年生れ
福島市土湯温泉町字上ノ町28
☎(024)5995-2335

理容師の免許を持つ齋藤弘道は、若い頃山仕事をしながら木地玩具類を制作していた。昭和二十九年の土湯大火後に本格的にこけし作りを始めた。二十七歳の時に太治郎の弟子、正一氏に師事し、当時は、一人で作る型はひとつだった。太治郎系だけは本人型、太子型、ろくろがえし型の三型を作っていた。齋藤弘道はその三型を受け継ぎ、太治郎系三代目の伝統と技術を守っている。

一言コメント

いつまでもお客さまに親しまれるよいこけしを作り、土湯こけしの灯を絶やさないように後継者を育てていきたいと思ひます。

土湯こけしは、 わたしの第二の人生



2 井上 正孝

昭和24年生れ
福島市下鳥渡字新町49の5
☎(024)5446-33885

井上正孝は、平成十八年七月に土湯温泉観光まちづくり協議会が主催した「土湯こけしものづくり学校」の土湯こけし工人養成講座に応募採用され、三年間の修行を積み、平成二十一年六月に土湯伝統こけし工人として認められた。応募時は、定年まぢかではあったが、勤め人であり、週一回土湯温泉を訪れては土湯温泉の歴史やこけしのイロハから学んだ。井上の場合、一人の工人に師事して修

一言コメント

早く伝統の技を習得してお客さまに愛されるこけしづくりを目指していきたいと思ひます。

創作こけし玉手箱

伝統は守らなければならないが、
伝承しなければ繋がない。
伝統を残しつつ、時代にあったこけしを作り、
技術を守り繋げていく。



▲万華鏡こけし



ぼほえみがえし



福車



▲絆こけし・あかりこけし



▲おととこけし



▲遠のつどい



土湯こけしは、 土湯温泉の誇り



6 陳野原 幸紀

昭和22年生れ
福島市土湯温泉町字杉ノ下21
☎(024)5995-2329

味処ひさこの店主でもある陳野原幸紀がここの道に入ったのは昭和四十五年、二十三歳の時。そのきっかけがスキーで骨折したためというものであった。実兄がこけし工人であった陳野原和紀氏で、以前から兄の仕事に興味があり、こけし作りには興味を持っていて、骨折の完治に思わぬ時間がかかったため、リハビリの傍らこけし作りの練習を始めたのが、きっかけとなった。本

一言コメント

こけしは全体のバランス。味がなければダメなんです。こけしの顔を見たときに何か感じてもらえればうれしいです。

木に対する思い入れが、 わたしの土湯こけし



3 今泉 源治

昭和9年生れ
福島市土湯温泉町字懸戸尻9の7
☎(024)5995-2321

今泉源治は、二十三歳の道に入り、製炭と板金の仕事の傍ら、阿部広志氏や佐藤志馬氏に師事しこけし工人修行をした。今泉のこけし作りは、木こけしを作りたいたいという信念に沿って、材料選びから始まる。自ら山に入り、これと想った木を背負い山から運び出すなど、材料の選定には強い思い入れがある。この思い入れが、こけしの顔にも表れ、土湯系である浅

一言コメント

土湯こけしの伝統「技あり」というこけしを作り続けられるように、これからも腕を磨いていきたいと思ひます。

こけし工人さんのお店 & こけしに会えるお店



11 薬師こけし堂
昭和49年11月にこけし工人の技術の錬磨と精神的な統合の象徴として聖徳太子堂の境内に建立。
お堂の中には土湯こけしが飾られ、温泉の守護神である「薬師如来」とこけし工人の始祖であると言われる「惟喬親王（これたかしのう）」が奉られています。毎年4月の第3土曜日にこけし供養祭・筆供養が行われます。



12 聖徳太子堂
聖徳太子が仏教興隆のため派遣した家臣が病に倒れた時、太子が夢枕に現れ「土湯で湯治するように」と告げ、土湯で湯治したところ回復し、その後お堂を建て聖徳太子のご本尊を奉ったといわれています。
聖徳太子は建築、大工の安全を守るといわれていますが、土湯では家内安全、育児、学問の神様としてもあがめられています。



13 土湯見聞録館
簡素で素朴といわれる土湯こけしですが、工人や作られた時代によって趣は異なってきます。ここでは様々なこけしに触れながらその魅力の一端を知ることが出来ます。休憩がてらにお気軽にご利用下さい。
開館 9:00~17:00 (変更の場合有)





14 土湯伝承館
土湯見聞録館と同様に東北各地の様々なこけしにふれあう事が出来ます。
毎年4月に開催される「こけし絵づけコンクール」の入賞作品も展示されているこけしミュージアムです。
開館 9:00~17:00 (変更の場合有)



15 アサヒ写真館・喫茶ハーモニー
こけしを眺めながらジャズとおいしいコーヒーが楽しめるお店です。
こけしやこけし雑貨なども販売しています。
営業時間 9:30~17:00 不定休



日本一のこけし展示場
平成24年に誕生した日本一のこけし雛は約1m30cmの大きなお雛さま。五人ばやしまで揃った姿は圧巻です。そして翌年には2m超えの笠こけしが誕生しました。
ご自由に見学、記念撮影をして頂けますので、ぜひお立寄りください。

16 ひさご
土湯こけし工人、陳野原幸紀さんの営む手打ちそばと創作郷土料理のお店。
美味しいおそばを食べながら陳野原さんのお話も伺えます。
営業時間 11:30~14:00 定休日 木・金曜



17 山根会津屋
こけし工人、渡邊忠雄さんのお店。
お店の中にある工房でのこけし製作の様子も見学出来ます。
営業時間 8:00~18:00 不定休



18 さかえや物産店
こけし工人、渡邊隆さんのお店。
喫茶スペースではおいしいコーヒーやお団子を楽しめます。
営業時間 11:00~17:00 不定休



19 まつや物産店
こけし工人、阿部国敏さんのお店。
こけし工房もあり、こけしの絵付け体験もできます。
営業時間 8:00~18:00 定休なし



20 こけしクラフト西屋
こけし工人、西山敏彦さんのお店。
こけしなどの民芸品や雑貨を取り扱っています。
※事前にご連絡の上、お越しください。
TEL 024-595-2401



21 巨大こけし
「第30回土湯こけしまつり」を記念して土湯こけし工人総出で作られた3mの巨大こけし。
「こけし3姉妹」として誕生し、看板娘として活躍しています。



22 渡邊鉄男・こけし店
こけし工人、渡邊鉄男さんのお店。
木地挽きの大きな兜や大小さまざまなこけしにあえます。
※事前にご連絡の上、お越しください。
TEL 024-595-2056

